

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 20 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(A)

研究期間：2011～2014

課題番号：23242044

研究課題名(和文) 19世紀前半のアメリカ合衆国における市民編成原理の研究

研究課題名(英文) Studies of American Citizenship in the First Half of the Nineteenth Century

研究代表者

遠藤 泰生 (ENDO, Yasuo)

東京大学・総合文化研究科・教授

研究者番号：50194048

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 21,300,000円

研究成果の概要(和文)：「公民的要素」「政治的要素」「社会的要素」他の要素に市民権を分別しその成長を直線的に理解することに西欧の市民社会理解は特徴付けられる。しかし、19世紀前半のアメリカ合衆国における市民編成原理の歴史を理解するには、そのような枠組みは図式的すぎる。19世紀前半の合衆国における市民編成原理の追求は、領土の拡大と不断の移民の受け入れ、消費革命の浸透、奴隷制度の是非をめぐる論争などの問題に直面しながら行われた。本研究ではその歴史を、手稿請願、読書習慣、教会説教、大西洋世界における図像リテラシー他を媒体とする非公式の政治行為に携わる市民をも包摂する、巨視的視野から検討する。

研究成果の概要(英文)： Precedent studies of citizenship based on the history of modern Western Europe often lack a view to deeply understand the complexity of history of creating American citizenship during the first half of the 19th century. During that period, the United States experienced an unprecedented scale of territorial expansion, continual flow of immigrants, consumer revolution, and severe debates on the validity of Slavery in a country conceived in liberty and equality. In a society facing to those questions, a different mode of politics invite to-be-citizens participate into public sphere where they discuss hierarchy of political agenda in their civil society. While practicing informal politics through scribal publication, reading sentimental novels, listening to religious sermons, and sending petitions, sprouting class of American citizens of that period learned how to become good citizens and exclude others as not. This study explores that history.

研究分野：人文学

キーワード：市民 キリスト教 公共 アンティベラム アメリカ合衆国

1. 研究開始当初の背景

19世紀前半のアメリカ合衆国における市民編成原理に関しては、自由な個人を社会の根幹に据えるジョン・ロック的な自由主義の伝統と、人種や民族を軸とするコミュニティへの帰属を社会の根幹に据えるコミュニタリアン的な伝統の間で、市民の資質や資格が模索されたと解釈されてきた。加えて、近代西欧世界における市民権を「公民的要素」「政治的要素」「社会的要素」の三つに大別し、その段階的発展が市民社会の成長につながったと理解する T.H.Marshall や D. Heater 以来の整然とした市民社会理解が先行した結果、地域や民族で細分される集団ごとの市民編成原理の歴史が、領土の拡張を含めた国民国家の縁取りの拡大とともに複雑かつ重層的に展開した合衆国における歴史の実相が捉えきれずにきた。集団ごとの市民権獲得の歴史が加算的に記述されるのが、研究開始当初の研究の流れであったと言いまとめることができる。

2. 研究の目的

本研究は、19世紀前半のアメリカ合衆国における市民編成原理の歴史を、その理念と実態の両面から明らかにし、それを通して上記に記した同時代の合衆国史像の詳細を明らかにすることに目的をおく。そもそも研究史上この時代は、独立戦争と南北戦争という二つの歴史的事件の因果を説明する時代としてばかり注目され、それ以外の視点からは十分な注意を払われない傾向が強い。革命で自由を獲得できなかった黒人奴隷のその後の歴史が象徴する、人種を跨いだ「自由と平等」の進歩の歴史がこの時代の要とされ、それ以外の歴史には二次的意味しか与えられない傾向が強かったのである。だが、アメリカ例外論に適合するそのような単元的説明を拒む、重層的な歴史がこの時代には存在する。本研究は、宗教・ジェンダー・経済倫理など、人種意識とも密接に関連すると考えられながら、その接続が十分に説明されてこなかった諸点に留意しつつ、この時代の市民編成原理をめぐる歴史の立体的把握を目指す。

最終的には、19世紀前半の合衆国史像をより構造的、動態的に捉え、近代西欧世界における市民社会の変遷の歴史と比較する視点を獲得することを目的とする。

3. 研究の方法

1960年代以来西欧で大きな影響力を保ち、1990年代に入って合衆国でも急激に研究者の間に浸透したユルゲン・ハーバーマスの公共圏の概念をあらためて確認し、合衆国史の理解にその概念を援用することの妥当性を吟味することから研究を始める。ハーバーマスの概念が歴史研究に与えた衝撃の一つは、狭義の政治学的分析で補足される伝統的政治活動から、文化人類学や文学の視点を動員して補足される一般住民のパフォーマティ

ブな政治行為にまで、政治分析の領域を拡大したことにある。本研究でもその視点を援用し、連邦あるいは地方ごとの議会における法令制定過程はもとより、議会への非公式な請願運動や教会説教パンフレットの刊行、市民社会における読書習慣の確立、都市景観図の販売など、多様な経路を通じた市民社会の縁取りの歴史を検証する。

それらの作業を大別すれば、市民概念の記述概要を検証する「外形論」、市民概念の機能内容を検証する「実質論」、市民概念の変成をめぐる政治闘争を検証する「運動論」に分けられる。海外の研究協力者を含めた内外の専門家を招きながら、最低二月に一回のペースで合同研究会を開催し、互いの知見を交換しあうとともに、東京大学アメリカ太平洋地域研究センターをハブとする研究ネットワークを通じて成果の国内外への公開と批判のフィードバックを行う。

4. 研究成果

(1) Michael Warner が指摘したとおり、合衆国における公共圏の形成と18世紀出版文化の隆盛との間に密接な関係があることが明らかになった。しかし、David Hall が合同研究会で主張したとおり、印刷文化が浸透する前から、ニューイングランドなどで手稿を通じた非公式な政治的異議申し立てが通常化しており、ハーバーマスが説いた合理的な討議空間の外側に位置するそうした非公式な政治行為の伝統が、植民地時代以来醸成されていたことが確認された。

(2) 入植後の植民地社会が不断の領土拡張により政治共同体の規模を拡大し続けた英領13植民地では、(1)に記した活字と手稿の双方を重要なコミュニケーション・ツールとする政治共同体が、領土拡張と歩を合わせる形で拡大し続けた。市民社会の拡大と国土の拡張とが重なり合うこうした歴史の中で、市民権は、国民の定義に近似したものとして議論されるにいたったことが確認された。例えば、王や教会への対抗権力としてその足場を築いた西欧市民社会の生成の歴史と合衆国における市民社会の歴史はこの点で少なからず性格を異にするものと推測される。

(3) 女性参政権の要求をもって女性の政治参加の歴史起源としがちな従来の女性史の解釈に対し、奴隷制度廃止運動の大義を訴える議会請願ほかの活動を通じ、非公式ながらも女性が政治に一定の影響を与え続けていた事実が確認された。

(4) 市民の輪郭を縁取るのに、狭義の法令や裁判所の判定以外に、19世紀前半に人気を博した感傷小説やニューヨークで販売された都市景観図なども、平均的市民が備えるべき道徳規範や審美意識の浸透に影響力を持ったことが確認された。

(5) 市民編成原理は、政治当局側からの一方的な制限あるいは付与という形で社会に浸透するとは限らず、市民権付与への先住民の

アンヴィバレントな態度が示すように、その機能の善し悪しを基準に市民と名指される側が能動的な選択を繰り返すことで、社会に浸透する側面もあることが確認された。

(6)市民編成原理の練成には他者像が大きな役割を果たす。西欧の場合その他者を象徴するのが王権であり教会の権力であった。そうした身分制社会の権威が社会が開かれた時点から脆弱であった合衆国では、人種の異なる集団を他者に想定した市民論争が歴史の基軸におかれがちで、公共と市民という座標を備えたより巨視的な視野を備えた市民社会論が育ちにくかったことが確認された。

(7)従来の合衆国史研究に顕著であった市民編成原理の加算的歴史記述は、社会の近代化の指標として市民権の拡充を綴りがちであり、そのため、前近代的なさまざまな身幅を備えていたローカルなコミュニティにおける慣習の消失などへの十分な歴史的解釈が不十分であることが確認された。非合理的とみなされる神や霊への心情的傾倒などもその一例である。「公共」「市民」などの分析概念は多様性を排する画一的な市民社会理解を促しがちであり、その負の側面にも今後は十分な注意を払わねばならないことが確認された。

(8)今後、19世紀合衆国の市民編成原理が20世紀合衆国に継承される歴史の吟味が待たれることが確認された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 44 件)

荒木 純子、「ニューイングランド社会の形成とジェンダー」、ピューリタニズム研究、査読無、9巻、2015、pp.4-11

金井 光太郎、「アメリカン・システムのマニフェスト ヨーロッパ公法秩序とモンロー・ドクトリン」、アメリカ研究、査読無、49号、2015、pp.1-19

佐々木 弘通、「思想・良心の自由(19条)と宗教的自由(20条・89条)」、法学教室、査読無、405号、2014、pp.23-24

増井 志津代、「マサチューセッツ湾植民地における「カルヴァン主義的倫理」再考 - Robert Keayne, "The Last Will and Testament"(1653)を中心に」、アメリカ・カナダ研究、査読無、31巻、2014、pp.23-47

金井 光太郎、「安武秀岳『自由の帝国と奴隷制』:南部プランター階級のヘゲモニーとアメリカのデモクラシー」、アメリカ史評論、査読無、30号、2014、pp.30-38

松原 宏之、「歴史の変動、歴史家と変革 - レイモンド・フォスディックと第一次世界大戦期アメリカ改良運動の交錯する波」、歴史学研究、査読有、913巻、2013、pp.1-11

森 丈夫、「北米植民地代理人ジェレマイア・ダマーのイギリス帝国 - 18世紀アングロ・アメリカ政治の一面」、アメリカ研究、査読有、47号、2013、pp.59-78

中野 勝郎、「『共通の信仰』と『道徳的人間と非道徳的社会』」、年報政治学、査読無、2013年版-I、2013、pp.81-100

荒木 純子、「初期アメリカの女性・身体・宗教」、学習院大学人文科学研究報、査読無、2012年度版、2013、pp.84-87

Yumiko Nakano、"The Campaign for Civilization or Removal: Thomas L. McKenney and Federal Indian Affairs in the Formative Years"、成蹊大学文学部紀要、査読無、第48号、2013、pp.85-95

森 丈夫、「アメリカ合衆国の白人伝統音楽の成立 - 地域間関係と国民文化の創造」、福岡大学研究部論集、査読無、11巻5号、2012、pp.9-16

遠藤 泰生、「大西洋から太平洋に:グローバル時代におけるアメリカ研究の行方」、オデッセウス、査読無、第15号、2011、pp.1-17

〔学会発表〕(計 21 件)

松原 宏之、「第一次世界大戦経験の政治文化史 革新主義運動の高潮、頓挫、余波」、アメリカ史学会、2014年9月27日、亜細亜大学(東京都武蔵野市)

増井 志津代、「マサチューセッツ湾植民地におけるピューリタン倫理と奴隷保有 Robert Keayne, "The Last Will and Testament"(1653)を中心に」、日本ピューリタニズム学会第8回研究大会、2013年6月22日、聖学院大学(埼玉県上尾市)

中野 由美子、「「植民」対「征服」:合衆国「西部史」研究と先住民」、日本ラテンアメリカ学会第34回定期大会、2013年6月2日、獨協大学(埼玉県草加市)

Yasuo Endo、"Seeking New Directions of American Studies in the 21st Century"、ANZASA 2012 Biennial Conference、2012年7月6日、University of Queensland(オーストラリア、ブリスベン)

中野 由美子、「「内なる他者」としてのアメリカ先住民と公教育」、洛北史学会、2011年6月4日、京都府立大学(京都府京都市)

〔図書〕(計 17 件)

増井 志津代、小塩 和人、大塚 寿郎 他8名(上智大学アメリカ・カナダ研究所編)、上智大学出版、北米研究入門 「ナショナル」を問い直す、2015、302(分担執筆部分 pp.33-62)

松原 宏之、ナカニシヤ出版、虫喰う近代 1910年代社会衛生運動とアメリカの政治文化、2013、304

橋川 健竜、東京大学出版会、農村型事業とアメリカ資本主義の胎動 共和国初

期の経済ネットワークと都市近郊、2013、
216

中野 勝郎編著、法政大学出版局、市民
社会と立憲主義、2012、309(分担執筆部
分 pp.40-45)

高橋 和之、安西 文雄、佐々木 弘通
他 4 名、有斐閣、ケースブック憲法、2011、
865(分 担 執 筆 部 分
pp.167-200,265-293,377-409,755-789)

6. 研究組織

(1)研究代表者

遠藤 泰生 (ENDO, Yasuo)
東京大学・総合文化研究科・教授
研究者番号：5 0 1 9 4 0 4 8

(2)研究分担者

中野 勝郎 (NAKANO, Katsuro)
法政大学・法学部・教授
研究者番号：7 0 2 1 2 0 9 0

増井 志津代 (MASUI, Shitsuyo)
上智大学・文学部・教授
研究者番号：8 0 1 8 1 6 4 2

荒木 純子 (ARAKI, Junko)
学習院大学・文学部・准教授
研究者番号：2 0 3 9 6 8 3 1

松原 宏之 (MATSUBARA, Hiroyuki)
横浜国立大学・大学院都市イノベーション
研究院・准教授
研究者番号：0 0 3 3 4 6 1 5

橋川 健竜 (HASHIKAWA, Kenryu)
東京大学・総合文化研究科・准教授
研究者番号：3 0 3 6 1 4 0 5

肥後本 芳男 (HIGOMOTO, Yoshio)
同志社大学・グローバル地域文化学部・教
授
研究者番号：0 0 2 4 7 7 9 3

佐々木 弘通 (SASAKI, Hiromichi)
東北大学・法学研究科・教授
研究者番号：7 0 2 5 7 1 6 1

森 丈夫 (MORI, Takeo)
福岡大学・人文学部・准教授
研究者番号：9 0 3 3 0 8 9 4

中野 由美子 (NAKANO, Yumiko)
成蹊大学・文学部・教授
研究者番号：4 0 3 6 2 2 1 4

久田 由佳子 (HISADA, Yukako)

愛知県立大学・外国語学部・准教授
研究者番号：4 0 3 0 0 1 3 1

金井 光太郎 (KANAI, Kotaro)
東京外国語大学・大学院総合国際学研究
院・教授
研究者番号：4 0 1 4 3 5 2 3

(3)連携研究者

Joyce Chaplin (CHAPLIN, Joyce)
ハーヴァード大学・歴史学部・教授

Christopher Capozzola (CAPOZZOLA,
Christopher)
マサチューセッツ工科大学・歴史学部・准
教授

David Goodman (GOODMAN, David)
メルボルン大学・School of Historical and
Philosophical Studies・教授

David Jaffee (JAFFEE, David)
Bard Graduate Center・Head of New Media
Research・教授

David Hall (HALL, David)
ハーヴァード大学・Harvard Divinity
School・教授